

A black and white Border Collie puppy is sitting on a red mat with a white snowflake pattern. The puppy has a white blaze on its face and white paws. In front of the puppy is a yellow, crumpled toy. In the background, a white metal cage is visible.

ボギーがいた日々

ボーダーコリーと暮らした14年

佐藤英二

1. はじめに

2013年4月16日(火)

その日の空は雲一つ無く、とてもさわやかに晴れ渡っていた。

自宅のリビングの窓からは、明るい春の日差しが降りそそぎ、カーテンを揺らしながら入ってくる心地よい風を身体に受けながら、愛犬ボギーは14年と4ヶ月の生涯を閉じた。(写真は2012.10)



ボギーが旅立って約4ヶ月が経った今、彼を失った直後の苦しみや悲しみと比べると、私の心は少しは回復したように思える。ただ、時間と共に彼との思い出が、風化して行くのではないかと心配している。

まだ、ボギーへの愛しさや思い出が強く残っているうちに、彼と暮らした14年余りの歳月を振り返り、彼が生きた証としてここに書き留めておこうと思う。

それを通して「犬を飼うこと」「犬を愛すること」、そして「愛犬との別れ」について考えてみたい。

2. ボギーとの出会い

転勤で横浜に来て4年が過ぎた平成10年の年明けに、戸建ての家を建てた。私たち夫婦には子供がなかったこともあり、妻に「犬でも飼おうか」と相談すると即座に賛成してくれた。

さて、どの犬種にしようかと何軒かペットショップを覗いたが、しばらく決めきれずにいた。当時は、テレビのCMに出ていたウェルシュコーギーが人気だった。ただ、私は藤沢市のとある公園でフリスビーをしていたボーダーコリーの運動能力に驚き、犬を飼うならボーダーコリーも良いなと思っていた。

ある日、ボーダーコリーについて調べていたら、秦野市に「[愛犬ハウス セキノ](#)」というブリーダーがあり、そこではボーダーコリーを扱っていると知り、早速、妻と車で出かけることにした。

高速に乗り約1時間でセキノに着いた。山に囲まれた広い敷地に大きな犬舎が何棟か建っている。

事務所に入り受付でボーダーコリーを見せて欲しいとお願いし、犬舎の中に案内して貰った。

犬舎の入り口のゲージに二匹のボーダーコリーが入っていたが、体重が30kg近くありそうな大きな犬だった。「こんなに大きくなるのなら、飼うのは無理かな」と感じつつ、犬舎に入った。

そこはボーダーコリーだけの犬舎のようだった。

最初に見せてもらったのは生まれてまだ2ヶ月程の子犬6匹とその母親の家族だった。

彼らは母親を中心に囲いの真ん中に固まっていた。その隣の囲いの中には母親と生後2ヶ月の子供2匹の家族がいた。その家族の子供は既に何匹か買い取られていた。その子犬の値段は30万円だったと思う。とてもその金額は出せないで、それよりは安かった最初の家族に戻った。

妻と二人で家族の様子を覗いていると、そのうちの1匹が近づいて来た。私はその子を抱きかかえ顔や身体つきを覗いて、「こいつにしよう」と決めた。6匹の子犬を比較検討などとてもできないので、一番先に近づいて来た子犬に決めたのだ。これがボギーとの出会いだった。

私たちはきれいに洗ってもらったその子犬と、犬舎の臭いのするタオルと一緒に受け取った。車に乗り込んだ時は既に日が傾いており、まっすぐ家路を急いだ。助手席では妻が愛おしむ様に子犬を優しく抱いていた。



帰宅後、どうしたかは流石に記憶は定かではないが、ダンボール箱に穴を開け、もらったタオルを敷いて犬小屋代わりにしてやったように思う。

ただ、いつもは二階の寝室で寝ていた妻が、その夜だけは一階の居間で子犬と添い寝をしたことだけは、はっきりと覚えている。

後日、妻から聞いたのだが、添い寝している時、ボギーは妻を母親と思ったのか頭の髪の中に顔を埋めてきたという。(写真:我が家に来て間もない頃のボギー)

翌朝になり、子犬の名前を付けようといういろいろ考えた。洋犬(牧羊犬)でオスなのでやはり横文字が似合うだろうとあれこれ悩んだ末、男らしい犬に育てて欲しいと思い「ボギー」と名づけた。

なぜ「ボギー」が男らしい名前なのかちょっと説明しておこう。

ご年配の方なら往年のハリウッドスターである「[ハンフリーボガード](#)」をご存知かと思う。彼のニックネームが「ボギー」なのだ。

彼は『[カサブランカ](#)』(第16回アカデミー作品賞)で名声を馳せ、その渋くダンディな外見と男らしい振る舞いは我われ男性から見ても魅力ある俳優だった。

このカッコいい「ボギー」をテーマにひとつの映画作品が作られた。「[ボギー！俺も男だ](#)」(原題名『Play it again Sam』)というタイトルの「カサブランカ」のパロディ映画だ。

主演はウッディアレンで、彼は『カサブランカ』の中の「ボギー」のようになりたいと行動するのだが。映画のストーリーはともかく、この子犬にも是非男らしい犬になって欲しいと思い「ボギー」と名付けたのだ。

因みに、「ボギー」という名前の由来を即座に言い当てた人は生涯3人だけだった。

その内の1人は昨年アメリカを旅行した時に、列車で知り合ったアメリカ人の年配の男性だった。

彼に愛犬の写真を見せ、「ボギーという名前の由来分かりますか」と訊くと、即座に「ハンフリー・ボガードだろ」と言い当てた。さすがアメリカだと思った。

3. いたずら時代



どんな犬でも子犬の頃はいたずら盛りだ。ボギーもその例外ではなかった。

家に来て数ヶ月が経った頃、新築の家の中はドッグランと化し、リビングのフローリングの表面はボギーの爪でメッシュ状態になり、階段や家具は彼の鋭い牙でその材質をあらわにされた。

でも、家はいつかは朽ちていくものなのだからとあまり気にはしなかった。

ある日、リビングに居たら、ボギーが玄関から部屋に入ってきた。見ると、口には靴を咬んでいたが、その靴を見て爆笑した。彼は玄関に並べてあった2足の靴の真ん中を咬え、2足共きちんと綺麗に咬えていたのだった。

それから、あれは、いつだったのだろうか。我が家の隣にメスのコリーを庭の大きな犬舎で飼っているお宅があり、犬の名前を「ナナ」と言った。何度かボギーは一人で自宅から抜け出してナナちゃんの犬舎に遊びに行くのだった。だが、彼の目的はナナちゃんではなく、犬舎に置いてあるナナのおやつだったのだ。



ある日、ボギーがゴソゴソとリビングで何かをかじっているのので、覗いてみると豚か何かの20cmもある硬く大きな皮のジャーキーだった。私はそれを取り上げて、「これどうしたんだ?」「ナナちゃんのお母さんに貰ったのか?」と問い詰めると、困った顔をした(写真左)。

ジャーキーは賞味期限をはるかに経過し、変色した状態で、ボギーが黙って咬えてきたのは明らかだった。しかも、そこのお宅のご主人は警察官だった。大胆にもほどがある。ボギーに窃盗罪の犯罪歴が残った。

ジャーキーを返してやると、ボギーはそれをすべて完食した。

あれはボギーが5才くらいだったのだろうか。私が家において少し目を離していたら、ボギーの姿が見当たらない。家の中や周りを探したがやはりいない。ふと見ると、玄関の門扉が開いているではないか。まさか、外に抜け出したのか。だとすると、いつも散歩している公園に向かったに違いない。

私は急いでバイクに乗り、散歩コースを追いかけた。しばらく走ると、広い道路に降りていく階段の前で数人の作業者が工事をしていたので、作業者の一人に訊いた。

「今、ここを白黒の犬が通りませんでしたか?」

「犬ならさっき、その階段を降りて行ったよ」

やはりそうか。私は慌てて方向転換し、「交通事故に遭わないでくれよ」と祈りながら、別のルートで公園に向かった。

5分くらいで公園に着いた。グラウンドに入るとボギーは他の犬仲間と元気に走り回っていた。

「良かった。事故に遭わないで」ホッとしたが、公園に来ていた飼い主の女性が近寄って来て、「ボギー、道路を渡るとき危なかったのよ」と教えてくれた時、ぞっとしたことを覚えている。

ボギーが我が家を抜け出して公園や遠くに行ったのはその時だけだった。

4. 公園の遊び仲間

家から歩いて10分の所にひっそりとした、静かな公園がある。

小学校の前の道路を渡ると、一辺20mくらいの四角形をした池があり、池の中には魚や亀が泳いでおり、周りには鳩や鴨も集まっている。



池に沿って歩くとすぐに、ネットに囲まれたグラウンドがあり、休日には地元の野球チームが練習をしている。

平日は公園を散歩する人は少なく、犬を遊ばす場所としては本当に貴重な広場だった。

(写真：座っているボーダーコリーはボギーより2歳年下のロン。ボギーが一番後ろ)

ボギーは生後3ヶ月の時、公園デビューを果たし、数多くの友達ができた。そして、飼い主の我々にもイヌ友ができ、地域での交流範囲が大きく広がった。

夕方、5時近くになると、自然と犬仲間が集まり始める。多い時は15匹近くになっただろうか。

公園でのイヌ友はやはりある程度序列があり、古手が発言権を持っている。

当時、イヌ友を仕切っていたのは「ゴンちゃんママ」と呼ばれている60歳くらいの女性だった。

「[ゴンちゃん](#)」は体長40cmの茶色い雑種で、当時、年齢は既に16歳くらいだった。ボギーはその女性にも気に入られた。

ボギーは本当にどの犬からも好かれた。去勢しているせいなのかオスからも好かれたのだ。
(^^;

体重が40Kgもありそうな、しかも顔の厳つい、真っ黒なラブラドルの「[アレックス](#)」(♂)はボギーを見つけると、飼い主を引きずってボギーに近づき、上に乗りかかろうとして、ボギーを困らせた。

アレックスはいつも息をハアハアと言わせ、口からヨダレ(汗かも知れないが)を垂らし、おかげで、洗ったばかりのボギーの毛が「ベトベト」になって困った思いもした。

同じ年のラブラドルの「[ラブちゃん](#)」(♀)は結構気が強く、被害を被ったワンちゃんも何匹かいたのだが、ボギーは何故か彼女にも気に入られた。

5. 犬と泊まれるペンション

ボギーとは何度か車でペンションに行き一泊旅行をした。最初の旅行はまだボギーが5才くらいだっただろうか。

初めての旅行はまだ記憶に残っており、伊豆高原にある「[四季](#)」というペンションだった。部屋数は少なく、こじんまりとした広さだった。食事が本格的なフレンチだったように覚えている。

それから、「[ラムールノア](#)」(静岡)、「[サンデッキ](#)」(千葉)、「[モンターナ](#)」(山梨)、「[TOUTOU](#)」(山梨清里)、「[リングウッドフィールド](#)」(千葉)などに行き、宿泊はしなかったが「[八ヶ岳ワンワンパラダイス](#)」(山梨)でドッグランを楽しんだこともあった。

ボギーが10才くらいになると遠出もしなくなり、近場のペンションを探し、「[ジョディ&プリン](#)」(神奈川)に2度行った。そこは車で1時間くらいなので運転も楽だったこともあるが、ペンションは立派な鉄筋コンクリート作りで、海に近く、景観も良く、スタッフの対応も良かった。

(このペンションは残念ながら昨年(2012.3月)に閉館した)

ボギーは車中ではテンションが高く、窓から顔を出して対向車に向かって、ワンワン吠えまくる。まさに対向車に噛み付くぞ言わんばかりに、歯をカチカチ鳴らす。しばらく吠えたあと疲れると静かになり、助手席の足元に丸くなって眠った。

起きている時は後部座席の窓際に座っているのだが、いつの間にかパワーウィンドウの開け方を覚え、自分で窓を開けて吠えるようになり、通常は窓を開けられないようロックすることを余儀なくされた。

逆に、ペンションの中ではテンションは低く、他の犬ともさほど遊ぶことも、喧嘩をすることもなく、おとなしくしていた。食堂でも無駄吠えもしなかったので安心して食事ができた。

野外のドッグランではボールを投げると一目散に追いかけていき、それを啜って持って帰ってくる。ボギーはドッグランや森の中を散歩する時が一番楽しそうだった。

ペンション「[TOUTOU](#)」に泊まったとき、夕食後にお客さんが集まり、ペンションの看板犬のゴールデンリトリバーが芸を披露してくれた。

それは鼻先にクッキーを乗せて、瞬間的に落とさずそのクッキーを食べるというものだった。上手くいくとお客さんから拍手を貰っていたが、それを見ていたボギーは「ワン！ワン！」と身を乗り出して吠え始めた。それは「僕だってその芸はできるんだぞ」というアピールだったのだ。

彼にとってそんなことは容易なことだった。彼は教えなくても、鼻の上におやつを乗せると落とさずに瞬間的に口で受け取ったのだ。

ボーダーコリーの凄さは運動能力が高いということは言うまでもないが、飼い主が何を期待してるかの察知能力が高いということにある。

「お手、お代わり」、「右回り、左回り」などは数回で理解し、「バン！」とピストルで撃つ真似をするとバタンと倒れるという芸もすぐに覚えた。背中を見せて「おんぶ」と言うとジャンプして、背中に飛び乗った。そのうち、背中を見せるだけで、雰囲気を感じて飛び乗るようになった。

6. 愛犬の老い

ボギーは10歳を過ぎると、次第にボールに興味がなくなっていった。

公園でも自分はボールを追いかけないで、ウェルシュコーギーのジュリアが飼い主の投げるボールに対して構えているその後ろに立ち、ジュリアの動きに合わせて遊んでいた。

ジュリアは「邪魔になるからやめてよ!」と何度かボギーに突っかかっていたが、ボギーはすっと身をかわしその遊びを繰り返し楽しんでいった。

そのうちボギーはそういった遊びもやらなくなり、公園に来ては歩くだけの散歩になっていった。もうそれで十分だったのだ。

時が経ち、ボギーも13歳の半ばを過ぎた暑い夏の夜、一階の居間で寝ていた私のところに歩いて来て、ふらふらしたかと思うとストンと腰を落とした。

「どうしたんだろう」と彼を支えて起こそうとするが、立ち上がれない。ひょっとして脳梗塞でも起こしたのかと心配したが、翌日のお昼頃には食事を食べ始め、元気になり一安心した。

エアコンは24時間入れていたが、一時的な熱中症だったのではないかと思う。

その頃から、ボギーは次第に後足が弱くなってきた。

我が家の玄関は私道から階段を6段上がったところにあり、ボギーは下りる時は「タタッ」と走り下りるのだが、上るときは一段ずつゆっくりとしか上れなくなっていった。時には途中で座り込むこともあった。

それでも、用を足すときは玄関を出て、家の周りですてたし、一日に何度か家の周りを歩いていた。

7. 発症・闘病・介護

1月7日(日)

昨年末、ボギーのあごの下に、リンパ球が腫れたと思われる小豆状のものが左右に2つできていた。以前から気にはなっていたのだが、年が明けてから急に大きくなったので、これはただ事ではないと、動物病院に行った。

レントゲンと血液検査を済ませた後、2~3時間待ち、祈る気持ちで検査結果を聞いた。先生の診断は「**悪性リンパ腫**」つまり「**癌**」だった。やっぱりそうか。最悪の結果だ。仕方がない。その日から抗癌剤治療が始まった。

しかし、本人は食欲も旺盛で、後ろ足が弱くなったとはいえ、外に出て用を足したり、家の中を歩き回っている。薬の効果もてきめんで、3~4日でリンパ球が驚くほど小さくなった。

それから3週間が経過し、体調も良くなっていると思ったのだが、2月20日に事態が急変した。

その日の午後2時頃私がリビングでパソコンに向かっていると、キッチンの前でこっちに背中を向け、伏せた格好で何かを舐めていた。近寄って覗いてみると、それは真っ赤に血に染まった2本の前足だった。

最初は何が起こったのかまったく理解できなかった。一体何の血なんだろう。吐血でもしたのか。鼻と口元辺りが血に染まっている。ドッグフードの空き缶で口でも切ったのだろうか。口元を触っても良くわからない。

更に目を凝らして見ていると、鼻から血が滴り落ちているようだった。やはり癌の影響だろうか。

とにかく鼻血を止めなければならない。床や脚に滴る血をタオルで拭いてやる。ポタリポタリと落ちてきてなかなか止まらない。タオルも血でぐっしょりしてきた。タオル一枚では間に合わない。バケツに水を入れタオル3枚を使って傍で付きっ切りで血を拭いた。

ふと横を見るとキッチンの戸に血しぶきが付いていた。多分、鼻が血で詰まって苦しくて鼻から飛び散ったのだろう。

40分以上過ぎてもまだ血が止まらない。バケツの水も真っ赤に染まっている。これでは失血死しかねない。病院に電話して処置を仰ごう。今、3時過ぎだ。病院の営業時間は4時からだがそんなことを気にしてたら最悪の事態になりかねない。

電話すると先生が直接出た。状況を話すと「病院では止血剤を飲ませることくらいしかでき

ない」とのこと。応急処置として「鼻の穴にティッシュを詰める」「鼻を冷やす」「極力動かさない」等の指示を受けた。

しかし、鼻が詰まって苦しんでいる犬にティッシュを詰めるなんてできる訳がない。しょうがないので血が止まるまで待つことにした。

ボギーは自力でキッチンから廊下に出た。彼にも疲労感が見える。ボギーが横になろうとした。が、そうなるとそのまま死んでしまうのではないかと恐れ、反射的に彼の身体を支えた。

ふと見ると、鼻の穴からゼリー状のものがだらんと垂れている。何だろう。血の塊(血栓)だろうか。気持ち悪いがそんなことは言ってもらえない。直接指で掴むと弾力のある柔らかいゴムみたいだった。それは鼻の左穴に繋がっていた。

引っ張っても大丈夫だろうか。ボギーも息苦しそうなので思い切って引っ張ってみると、それは途中で切れて、残りは鼻の穴に残ったままになった。やはり血栓だった。

ポタポタ落ちる鼻血を拭き続けて2時間以上過ぎただろうか。鼻血がやっと止まった。長かった。その日以降、ボギーは鼻血を出すことはなかった。

9. 旅立った日

4月16日(火) 快晴

その日は雲ひとつなく空は青く澄んで、窓からは心地よい春の風がカーテンを揺らしながら部屋に入っていた。ボギーはそのカーテンの近くのリビングの床に横たわっていて、風を身体に受け、白と黒の毛は風に揺らいでいた。

昼前にボギーが目を覚ましていたので、窓からの景色を見せてやりたくて、カーテンを開けてやると、春の日差しがボギーの顔に当たり、白内障で少し白くなった瞳をまぶしように細めた。

その時の、その眼差しとその表情は、私が今までに見たことが無いほど、本当に穏やかで優しいものだった。

まぶしそうなのでカーテンを元に戻そうとしていると、突然ボギーは横になったまま頭だけを上に反らした。かと思うと後脚と前脚が細かく痙攣し始めた。

私は驚き、彼の身体を抱きかかえ、「ボギー！ボギー！」と大声で繰り返し名前を呼んだ。

ボギーは目を見開き、中空を見据え、のどを『ぐっ、ぐっ』と数回鳴らしたかと思うと、やがて呼吸が止まった。その間、鳴き声を一度も発することはなかった。目はずっと見開いたまま。だが、手を当てると心臓はまだ脈打っている。

1分間が過ぎただろうか、やがて鼓動は止まった。そして、それっきりボギーは動くことはなかった。

これが愛犬との別れのなのか。余りに突然で悲しみの感情さえ湧いて来ない。

しばらくの間、まだ温かい彼の顔や頭や身体を撫でてやった。何も言わず、何度も撫でてやった。

その後、ボギーをソファーに移してやろうと抱きかかえた時、その感触で「ああ、ボギーはもうここにはいないんだ」ということを強く実感した。

しばらくして、今までお世話になった病院の先生に報告するために電話をかけた。

「先生、先ほど、ボギーが旅立ちました」

先生は少し驚いて、「思ったより早かったですね。まだ大丈夫だとは思ったのですが...」

「いえ。もう十分に生きてくれたので満足しています」と言い、「今までお世話になりました」と続けて話している途中から感情が込み上げ、言葉にならなくなった。

それから、ボギーのために花を買いに外に出た。

何の飾りっ気もないソファーにぽつんと横になっているボギーを見ていると、余りに不憫だと感じたのだ。その時、「死者を弔う場合に花で囲む」ことは自然の感情だと気付いた。

夕方になった。花で囲われてソファーに横になっているボギーを見ながら、「これでボギーもやっと闘病から解放されて自由になってよかった」と思った。勿論、生きていて欲しいのだが、動けない状態の時、一番悔しく、辛い思いをしたのは本人だったから。

この日、私は初めて飼った愛犬の死を迎えたのだが、この時は、死んだことの脱力感を感じたが、明日の葬式の手配等、雑用に追われてまだその死を本当に悲しむ余裕はなかった。

10. 別れの日

朝、目覚めて、ソファの花に埋もれたまま横たわっているボギーは、まるでまだ眠っているかのようだった。

残念ながら、今日は茶毘に臥さなくてはならない。できれば、ずっとこのままにしておきたいのだが...

斎場に電話をし、手続きを確認して、正午に車で斎場に持ち込むことにした。

埋葬の仕方には「個別火葬」と「合同火葬」の2通りある。その違いは焼骨を骨壺に入れて持ち帰ることができるか否かだ。

料金(20Kg~25kg)は個別が2万5千円で合同が3千円だが、ここは料金の問題というより、遺骨が必要かどうかという問題だ。

早速、妻と相談した。

「僕はボギーの遺骨を貰っても気持ちが癒されることはないし、遺骨がボギーの代わりになるとは思わない。ボギーの尻尾の毛の方が余程彼を近くに感じるよ」というと、妻も了解した。

そして、眠っているボギーの尻尾の毛をハサミで切り、ビニール袋に入れた。

ボギーを埋葬するため二つの段ボールをガムテープで貼り合わせ、棺桶を作った。棺桶の中にビニール製のシートを引きその上にバスタオルを敷いた。それを家の前に駐車してある車の荷台にセットした。

次に、ボギーを抱えて車まで運ばなければならない。死後24時間経過しているので、既に硬直してるだろうと遺体を両腕で抱えると、腰の部分が予想外に柔らかく驚いた。

慎重に遺体を抱え、玄関を出て、階段を降り、車まで運び、棺桶の中に納めることができた。

そして、遺体の上に私が買って来た可愛い青い花を飾ってやった。

斎場は自宅から車で10分もかからない場所にある。斎場に着き、受付を済ませ、妻と二人で車から遺体を棺桶ごと抱えて火葬場の入り口の重量計の上に置いた。遺体の重量を計測するためだ。19kgだった。

亡くなる数日間は食欲も衰えていたので、それから1kg痩せていた。その後、火葬するための荷台へ棺桶を載せた後、焼香を済ませた。

最後に、ボギーを見届けると、顔がバスタオルで隠れていたの、それを除けてやり、顔が見えるようにしてやり頬を触ってやった。そして、担当者に「よろしくお願いします」と言い、二人ともその場を後にした。

その間は、淡々と事務を処理していくようで、私自身、なぜか特に感情的な動きはなかった。

すべての手続きが終わり、妻と車に乗り込み一息ついた。

お互い特に話すことはなく、かといって、このまま自宅には戻りたくはなかった。ボギーがいない自宅に戻ることを避けたかった。そのまま、昼食をとるために隣町まで車を走らせた。

11. 終わりに



ボギーが旅立ってから約4ヶ月が過ぎた。

一階のリビングの出窓には、幾人かのイヌ友から頂いた、きれいな花に囲まれたボギーの写真が飾られている。

この写真はイヌ友に撮ってもらったもので、写真の中のボギーは瞳を輝かせ、笑顔を見せてこっちに向かって歩いて

来る。

さて、愛犬ボギーとの14年間4ヶ月を振り返ったが、彼との思い出は余りにも多く、その一つ一つが愛おしく、全てを思い出すにはとても時間が足りない。

彼とは文字通り寝食を共にして、まさに家族同然であった。ボギーは私が初めて飼った犬だったので、彼への思い入れは強く、彼を失った悲しみは想像を遥かに超えるものであった。

彼を失うまでは、「死んだらもう二度と会えない」という極めて当然のことが、これほど苦しいことだと感じたことはなかった。そしてその悲しみは、時が経つにつれて薄れていくのではなく、逆に、深くなっていくことも経験した。

もう一度ボギーに会わせてくれるのなら、何を失ってもいいと思うこともあった。事あるごとに思い出して涙していた。多分、ペットロス状態にあったのかも知れない。それ程、彼と過ごした歳月は、私の生活の主要な部分を占めていて、何事にも代えられないものになっていたのだ。

私は初めて会った、あのよちよちと歩いていたかわいい子犬に、「男らしい犬」になって欲しいと思いボギーと名付けたのだが、彼は「男らしい」というよりは、ほかの犬と喧嘩をすることもなく、どんな犬からも好かれ、多くの人から可愛がられる犬になっていった。それはそれでとてもうまく育ってくれたと思っている。

彼が息を引き取る前に見せた、「やさしく、穏やかな眼差し」と私の腕の中で「眼を見開き、一度も鳴き声を発することなく、毅然として死と向き合った態度」を思い出した際に私の胸は熱くなり、涙を禁じ得ない。死に直面したときに、あれほどの態度を私は示せるのだろうか。

ボギーは最後に、本当に最後に「男らしい犬」になって、その「男らしさ」を私に示した後、私の腕をすり抜けて行ったのだと思う。

〔付録〕 ボーダーコリーを知ろう

ボーダーコリーを飼い始めて、犬に対する関心が強くなり、書店に行っても犬関連のコーナーに類纂に立ち寄って情報を仕入れた。その中で特に役立った書籍を紹介しよう。



本のタイトルは『**デキのいい犬、わるい犬 ~あなたの犬の偏差値は?~**』（原題：**The Intelligence of Dogs**）といい、著者はカナダの大学教授(心理学)の**スタンレー・コレン教授**で、1994年に文藝春秋社から刊行されたものだ。

コレン教授はアメリカン・ケンネル・クラブに登録されている133犬種を「作業・服従知能」の観点から犬種別に1位~79位に順位付けをした。

それは北米の全服従訓練協議審査員(大半は犬の訓練士でもある)の約半数にあたる208名の専門家にアンケートを依頼し、その回答から得た情報を分析したものである。

そのアンケートの質問内容は、詳細で多岐にわたるが、その中で

①知能と技能のいくつかの面で最も人気の高い犬種74種

②最も知能が高いと評価できる犬種10種

③最も知能が低いと評価できる犬種10種

を挙げてもらい、それらについて意見を求めた。その結果は下記のとおりである。

まず、知能の高い犬種の**ベスト10**は

順位	犬種	順位	犬種
1	ボーダーコリー	6	シェットランド・シープドッグ
2	プードル	7	ラブラドル・リトリバー
3	ジャーマン・シェパード	8	パピオン
4	ゴールデン・リトリバー	9	ロットワイラー
5	ドーベルマン・ピンシャー	10	オーストラリアン・キャトル・ドッグ

次に、**ワースト10**がこれだ。

順位	犬種	順位	犬種
70	シー・ズー	75	ボルゾイ
71	バセット・ハウンド	76	チャウ・チャウ
72	ビーグル	77	ブルドッグ
73	ペキニーズ	78	バセンジー
74	ブラッドハウンド	79	アフガン・ハウンド

この順位の持つ意味を明確にするために、コレン教授は下記のように解釈を示している。

1位から10位

「作業・服従知能に関して最も優秀な犬種である。簡単な作業であれば5回以下の実践で理解を示し、一旦、習得すれば改めて練習しなくても忘れることはない。ハンドラーから与えられた1回目の命令に95%以上従うことができる。飼い主が離れた場所においても与えられた命令に数秒で応えられる」

70位から79位

「作業・服従知能の程度が最も低く、最も難しいと判断された犬種である。彼らは30回～40回繰り返して、やっと自分に何か期待されているらしいと気づき始める。基本的な作業を教えるために100回以上繰り返すことは珍しくない。1度学習しても練習を何度も繰り返して行う必要がある。さもないと、その課題をぜんぜん習っていないかのように行動する。」

この結果に関しての注意点は、「審査員の全員が犬種によって知能と訓練性能に差があることを認めながら、同時に犬の個体差が大きいことを指摘していること」である。

ただ、このデータで最も注目すべき点は「審査員の間で犬の順位にかなりの意見の一致をみた」ということにあるとも言っている。

コレン教授の分析結果の妥当性についてはコメントのしようもないが、ただ、ボーダーコリーが1位であることに関しては、14年間生活を共にした者として、「やはりそうなのか」と十分納得のいく分析結果だと感じた。

ボーダーコリーを飼い始めて2,3年経った頃から、この犬種は並の犬ではないと感じ始め、今でも、犬以上の動物だという思いを強く持っている。

因みに、前述したベスト10及びワースト10以外で、日本でポピュラーな犬種の順位は下記の通り。

順位	犬種	順位	犬種
11	ウェルシュコーギー	39	ダルメシアン
16	コリー	43	ポインター
20	コッカスパニエル	45	シベリアン・ハスキー
23	ポメラニアン	46	狆(ちん)
27	ヨークシャーテリア	49	ダックスフンド
33	サモエド	67	チワワ

ボギーがいた日々

<http://p.booklog.jp/book/56172>

著者：ボギー

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dfb070/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/56172>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/56172>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ